

### マルクス資本理論の経済学史上の位置

マルクスの「資本」理論は経済学史上どのように位置づけられるのであろうか。その「資本」理論は基本的にはケネー、スミス以来の古典派経済学と共通のものと考えられるが、その場合、彼の古典派批判、また生産価格と区別された労働価値説への固執はどのように理解されるべきなのか。「可変資本」は古典派の「賃金基金」と同じなのか？ 「不変資本」の実体が「死せる労働」＝「過去労働」であるとすれば、そこには時間要素は入らないのか？ 根岸隆はマルクスとベーム＝バヴェルクを対比してベームの方に軍配をあげているが、マルクスのなかにある「共存労働 co-existing labor」というアイデアにしたがって、多種生産＝労働の共時的構造を想定するならば、時間要素を含まない再生産基準の価値評価が可能である。しかし、生産体系の再生産が可能になる労働量が投下労働価値に一致するのは単純再生産の場合であって、拡大再生産を支える労働量はそれより大きくなる。一般利潤率が成立しているとすれば、最大成長率はそれに等しくなる。成長経済における労働価値はソ連の計画経済をめぐる議論のなかで気づかれていたが、20世紀末の理論経済学者によって再発見された。